【学力向上フロンティアスクール用中間報告書様式】（小学校用）

都道府県名	大分県

Ⅰ　学校の概要（平成１５年４月現在）

学校名	日田市立咸宜小学校								
学　年	１年	２年	３年	４年	５年	６年	特殊学級	計	教員数
学級数	3	3	3	3	3	3	1	１９	３１
児童数	101	105	95	112	87	101	1	602	

Ⅱ　研究の概要

１．研究主題

「算数科における基礎的・基本的知識技能の定着と向上を図る
指導のあり方を求めて」
～児童の実態や単元の内容に応じたきめ細かな指導を通して～

２．研究内容と方法

(1)　実施学年・教科

＊全学年　　算数
計算や技能の習熟や意味理解・数学的考え方の習得に個人差が生じやすい教科であるため。
学校として、当該教科に関する研究実績（加配教員による T・T 指導）があるため。

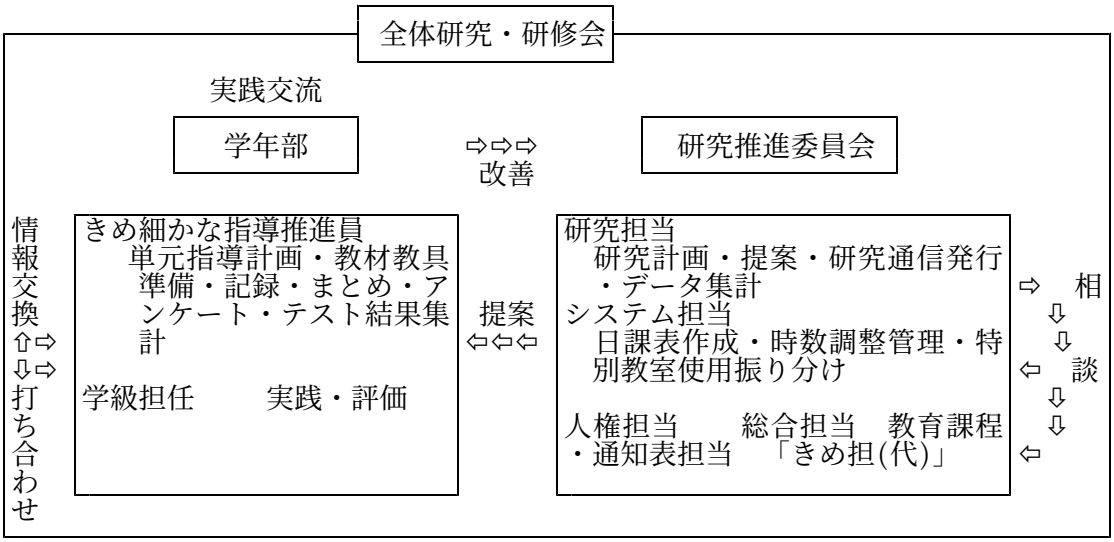
(2)　年次ごとの計画

平成15年度	○　テーマ　　基礎的基本的な知識技能定着と向上 「わかる喜び」を感じる児童 ○　研究の見通し　　学習場面毎のきめ細かな指導体制案つくり ○　研究の内容・方法 内容　　「きめ細かな指導」実践を通して ・T・T 指導・等質少人数指導・コース別指導それぞれの成果と課題検証 ・学習場面毎の有効的な指導体制検証 ・児童の実態に応じた（意欲やつまずきに応じる）指導体制検証 ・ドリル学習の継続による成果と課題検証 方法 ・全学年提案授業実施 ・全学年全単元指導計画・実践記録作成 ・学期毎の実践のまとめ作成・主な単元でのアンケート実施 ・学期毎の実践交流会実施 ・学校独自の日課表・教育課程（算数科における単元別指導体制案含む） ・通知表作成

平成16年度	○　テーマ　　基礎基本を身につける「きめ細かな指導」のあり方 「わかる喜び」「学ぶ楽しさ」を感じる児童 ○　研究の見通し　　きめ細かな指導体制・指導方法の工夫改善 きめ細かな指導体制確立のための評価のあり方と指導内容の充実 ○　研究の内容・方法 内容　　「きめ細かな指導」実践を通して ・T・T 指導・等質少人数指導・少人数指導の各々について以下の点を検証する。 ・効果的な授業のあり方 ・学習内容の吟味・教材の工夫 ・評価のあり方 ・有効的なドリル学習のあり方の検証

	方法 ・研究部会（指導体制別）よる評価・指導内容・指導方法充実に向けての提案と検証 ・全学年全単元指導計画・実践記録作成 ・学期毎の実践のまとめ作成・主な単元でのアンケート実施 ・学期毎の実践交流会実施 ・学校独自の形成的評価・個に応じた指導内容・指導体制に応じた指導方法の検証 ・学校独自の日課表・教育課程（算数科における単元別指導体制・指導方法・指導内容含む）・通知表作成 ・研究発表会実施

(3)　研究推進体制



Ⅲ　平成１５年度の研究の成果及び今後の課題

１．研究の成果

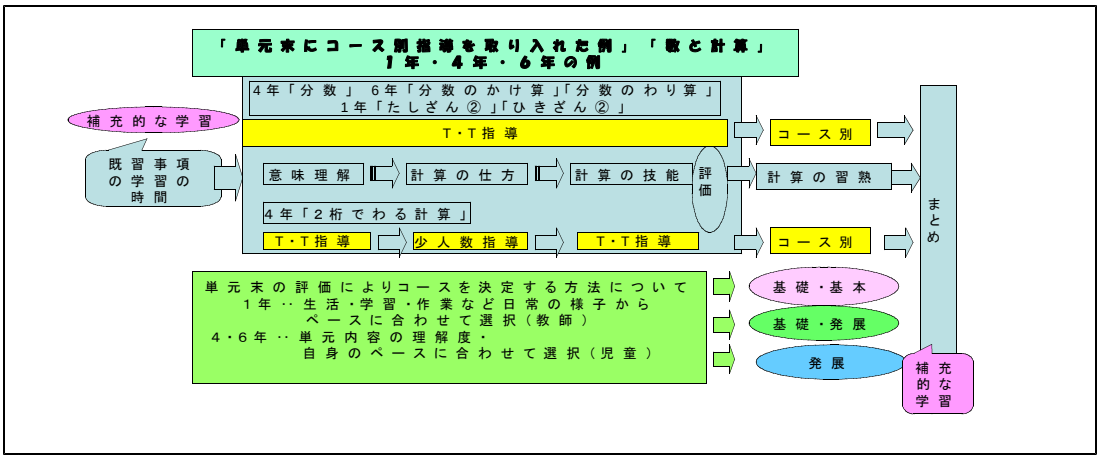
（１）指導体制別成果と課題

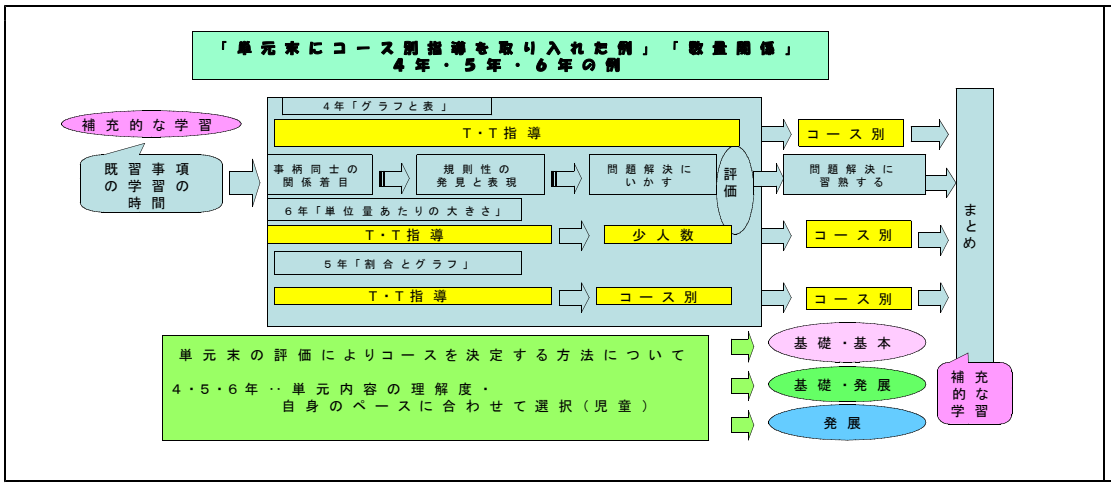
指導体制の分類
- TT 指導　学級を単位とし複数で指導
- 少人数指導　学級を等質に分割し単数で指導
- コース別指導　学級を内容別、ペース別に分割し単数で指導

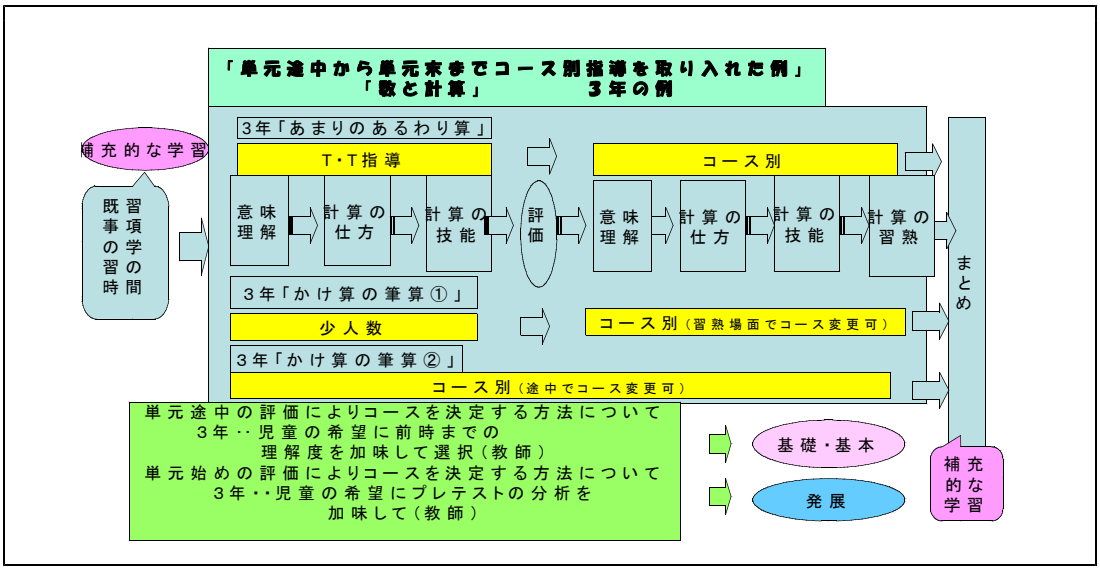
体制	成果	課題
T.T 指導	・T2 がきめ細かに指導できたので、評定 1・2 の子どもにも基礎的な力がついた。 ・子どものようすを把握しやすく目が配れた。 　子どもの実態（理解度・考え方・つまずき）を把握した上での適切な支援ができる。 ・教材・教具の準備ができ、指導計画・指導方法についての打ち合わせを十分行った結果、楽しんで取り組む様子がみられた。 ・自分でまずやってみようとする姿が一学期よりもみられるようになった。２人の声かけにより意欲化がはかれた。 ・採点の効率化	・T2 の支援の仕方は学習場面や児童の実態により変わるので、十分打ち合わせが必要。（打ち合わせができれば効果的） ・先生に頼りすぎて、考えない子が生じる。考える力がついていない。 ・打ち合わせの時間確保が難しい。 ・評定 4.5 の子に余力があるのでは。 ・実態に応じた学習方法も検討すべき。
少人数指導	・子どもの実態に応じて授業内容や進度が柔軟に対応できる。また個別の対処もできる。 ・人数が少なく教師の目が行き届く。 ・子どもにも適度な緊張感が持てた。 ・子どものノートを「きめ担」が作成し、学年共通理解のもと統一性のある指導ができた。 ・途中で担当グループ（教師）が変わった	・評定 1.2 の子どもたちは、T.T に比較して質問しづらかった。 ・指導計画、教具は統一していたが、微妙に指導に差があったのでは・・。 ・評定 4.5 の子どもたちは、他方のグループの進度が気になる。 ・つまずきがみえにくくきめ細かな指導ができにくかった。また、作業の速さによって単元末ではコース別

	ことは、良かったと判断できる。 ・一人あたりの発表機会がふえる。 ・授業中のドリル学習がきちんととれた。10～15 分 ・評定 4.5 の子どもたちは、たくさん問題がとけて満足できていた。 ・児童の考え方を把握しやすい。 ・教具を実際に手にとりやすい。	に切り替えた方が効果的であった。 ・学習環境の整備
コース別単元末	・内容の理解、定着によい効果があった。 ・自分のペースで生き生きと、また、まわりのペースにまどわされず落ち着いて取り組めた。 ・発展的な学習により学ぶ意欲が充足され、高まる。 ・ペース・理解度ともに個に応じた支援ができる。 ・単元末の習熟場面で行うことによりドリル学習さらに充実したものになった。	・コースの選ばせ方が難しい。 ・階層意識を生じさせないための工夫（コース名を固定しない等）が必要。 ・パンダコース（ゆっくりコース）では、いろいろなつまずきを持った子が集まり、支援が難しい。
コース別単元途中から単元末まで	・子どもの理解度にそって単元途中より T・T 指導や少人数指導から指導体制を変えたことは有効だった。 ・じっくり正しくできる方のコースを選ぶ子が増えてきて自分にあったコースを選べるようになってきた。	

（２）主な指導実践例　　学習場面と指導体制の関連を考慮して（「数と計算」「数量関係」において）

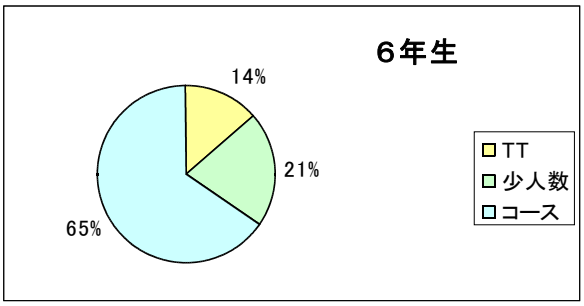


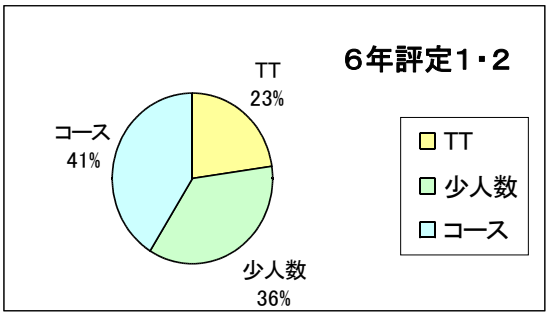


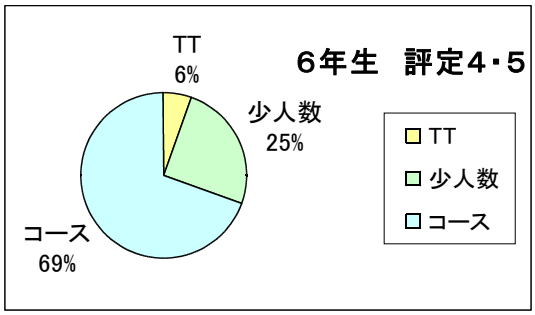


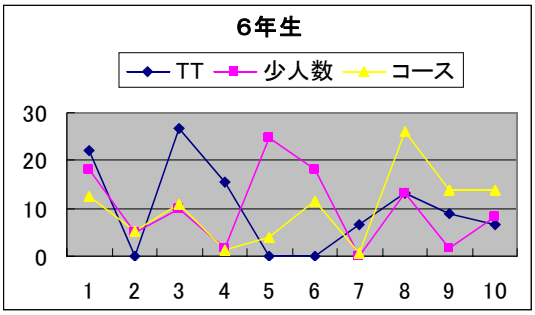
（３）アンケート結果より

Q、算数の勉強のやり方であなたがいちばん好きなやり方・一番あっていると思うやり方はどれですか。









選んだ理由
①わかりやすい
②楽しい
③わからないところを教えてもらえる
④みんな同じ勉強
⑤発表しやすい
⑥静かで集中できる
⑦いろんな先生と勉強できる
⑧自分に合うペース
⑨自分にあった問題をとける
⑩自分の力をのばせる

アンケート結果から
・６年生は全体的にコース別指導を支持していることがわかる。その理由の第一に「自分に合うペース」で学習できることを挙げている。
・評定１・２の児童については、TT 指導を支持する割合が比較的高くなっている。これは、わからないところを教えてもらえるというきめ細かな指導の長所を感じているためである。
・少人数指導を支持する児童は発表しやすいという理由を挙げている。これから授業に主体的に取り組もうとする意欲を感じることができる。

（４）学力テストの結果分析について
毎年年度始めの実施であるので、一年間の成果の分析は期を待たなければならない。

２．今後の課題
〇基礎基本の力を知識・技能という狭義なとらえから、本校児童の実態をもとに身につけさせたい力をより広義にとらえなおす。⇒「学ぶ意欲」「問題解決力」「自己表現力」　とらえ直した基礎基本の力の定着のために以下の点に重点を置いて研究を進める。
①身につけさせたい基礎基本の力を教科の視点できっちりとらえること。
学習場面のそれぞれでの基礎基本の徹底的した洗い出し
②学習場面と児童の実態を加味した「きめ細かな」指導を工夫すること。
・各指導体制の分類と適応場面を明らかにする。
・指導体制毎のより効果的な授業のありようを今年度の成果をもとに構築し指導方法を定着する。
・学習内容を吟味し指導体制にあった教材の工夫をはかるとともに補充の時間を確保する。
・少人数指導の場合の評価のあり方を追求する。

Ⅳ　学力等把握のための学校としての取組
〇学年始め２～６年算数科 NRT 学力標準検査の実施
〇学年始め４～６年国語科 NRT 学力標準検査の実施
〇実施後学年部・クラス毎に分析と対策を練る。
・児童一人ひとりの結果からその要因を「学習態度・生活態度・家庭環境等」から探り、指導の重点を置く。
・学年・クラスの「学力」の傾向を探り、特に定着が不十分な内容や単元については補充や指導方法の工夫をするようにする。

Ⅴ　フロンティアスクールとしての研究成果の普及
〇平成１６年１０月中旬　本校にて　研究発表会開催予定
・県内外の教職員対象
・研究成果の発表と今後の取り組みの指針を得るため。

◇　次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。（複数チェック可）

【新規校・継続校】　☑ １５年度からの新規校　□ １４年度からの継続校

【学校規模】　□６学級以下　□７～１２学級　□１３～１８学級　☑１９～２４学級　□２５学級以上

【指導体制】　☑ 少人数指導　☑ Ｔ．Ｔによる指導　□ 一部教科担任制　□ その他

【研究教科】　□ 国語　□ 社会　☑ 算数　□ 理科　□ 生活　□ 音楽　□ 図画工作　□ 家庭　□ 体育　□ その他

【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】　☑ 有　□ 無